

日本統治時代における「台湾人」の日本語使用：「台湾人」駅員に対する日本語使用の事例を中心に

著者	合津 美穂
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 10: 14-26 (1999)
発行年月日	1999-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022423

日本統治時代における「台湾人」の日本語使用

— 「台湾人」 駅員に対する日本語使用の事例を中心に —

合津 美穂

1. はじめに

台湾では、日本によって統治された 1895 年から 1945 年の 50 年間にわたり、日本の植民地政策の一つとして日本語普及が推進された。従来、日本統治時代の日本語普及の研究は政策史的な観点からのものが中心であり、当時の「台湾人」^{註1}の言語生活の詳細についてはほとんど知られていない。そこで日本統治時代から現在に至る「台湾人」の言語生活の実態を明らかにすることを目的として、1998（平成 10）年 7 月から 9 月にかけて東京都内及び台湾各地において、「台湾人」11 名に対し、聞き取り調査を行った^{註2}。

調査の結果、今回調査を実施した「台湾人」のインフォーマント 11 名のうち、日本統治時代に日本語を習得した 10 名のインフォーマント全員が、日本統治時代、自らの意志で使用言語を決定できた場面において、日本人に対してだけではなく、閩南語または客家語が使用できる日本語を習得した「台湾人」に対しても日本語を使用していたことがわかった。相手の「台湾人」は日本語だけでなく、閩南語または客家語が使用できたにも関わらず、なぜインフォーマントは日本語を使用したのだろうか。

本稿では、インフォーマントが閩南語または客家語が使用できる日本語を習得した「台湾人」に対しても日本語を使用していた事例のうち、インフォーマント H（女性・閩南系）・J（女性・閩南系）の「台湾人」駅員に対する日本語使用の事例を取り上げ、「台湾人」に対する日本語使用の要因を社会言語学的な観点から考察したい。考察にあたっては、インフォーマント H・J に対して行った聞き取り調査で得た録音資料を全て文字化したものと文献を資料として用いる。インフォーマントの談話を引用する際には、会話特有のいいよどみや重複、文意を不明にするような明確な言い間違いについては適宜除く。また、文意を補う場合は（ ）に記すことにする。

2. インフォーマントの言語使用

インフォーマントH・Jの日本統治時代の言語経歴、および言語生活について、聞き取り調査の結果から以下にまとめたい。

2.1 インフォーマントH(女性・閩南系)の場合

2.1.1 言語経歴

インフォーマントHは1924(大正13)年5月30日に台北州羅東郡三星庄大洲で生まれ、言語形成期を大洲で過ごした。Hが生まれ育った台北州羅東郡三星庄大洲には、日本統治時代、閩南系台湾人と日本人が居住していたが、閩南系台湾人が大多数を占めていた^{註3}。Hが日本統治時代に習得した言語は閩南語と日本語である。閩南語は母語として習得し、使用してきた。7歳の時、大洲公学校に入学したが、それまでは閩南語しか知らなかった。日本語は公学校に入って初めて勉強を始めた。Hの公学校時代の担任は、1・2年の時は閩南系台湾人、3年から6年までは日本人の教師だった。Hの通った大洲公学校の生徒は全て閩南系台湾人だった。16歳の時、宜蘭郡にある蘭陽高等女学校に進学した。インフォーマントHが進学した蘭陽高等女学校には、日本人の生徒と「台湾人」の生徒がいたが、日本人生徒の方が多かった^{註4}。蘭陽高等女学校の教師は全員日本人だった。

2.1.2 言語生活

Hは父の二人の弟の家族らと共に、30名ほどの大家族の中で育った。家族間の使用言語は閩南語だった。家長のおじ(父の1番目の弟)と教育を受けた子供達は閩南語の他に日本語もできたが、Hは閩南語で話していた。日本統治時代、Hは自分は日本人ではなく、「台湾人」であると思っていた。

Hは公学校1・2年の頃、日本語がよくわからなかったため、学校内でも閩南系台湾人の友人に対して日本語の他に閩南語を使用することもあった。学校内で生徒が閩南語を使用すると、教師は目を丸くして「国語(日本語)常用、国語常用」と言って叱ったが、罰を与えることはなかった。大洲公学校には閩南系台湾人と日本人の教師がいたが、Hはいずれの教師に対しても学内外を問わず日本語を使用した。

女学校時代は、学校内では「台湾人」の友人に対しても日本語を使用した。学校外で「台湾人」の友人と話すとき、閩南語が少し混ざることもあったが、

ほとんどが日本語だった。女学校時代、とても仲のよい友人7人で汽車通学をしていた。この7人の中には日本人が一人いた。この友人達と一緒にいるときには学校外でも日本語を使用していた。蘭陽高等女学校の教師は全員日本人であり、Hは教師に対して日本語を使用した。女学校には「台湾人」の小使いさんがいた。小使いさんは閩南語と日本語ができたが、Hは小使いさんと日本語で話した。蘭陽高等女学校への通学には汽車を利用した。Hが女学校に通学するときに利用していた羅東駅と宜蘭駅の駅員は「台湾人」の駅員だった。「台湾人」の駅員は客に対して日本語と閩南語のどちらでも対応していたが、Hは「台湾人」の駅員に対して日本語を使用した。

2.2 インフォーマントJ(女性・閩南系)の場合

2.2.1 言語経歴

インフォーマントJは1930(昭和5)年2月10日に台中州大甲郡清水街で生まれ、言語形成期を清水街で過ごした。Jが生まれ育った台中州大甲郡清水街には、日本統治時代、閩南系台湾人、日本人等が居住していたが、閩南系台湾人が大多数を占めていた^{註5}。Jが日本統治時代に習得した言語は閩南語と日本語である。閩南語は母語として習得し、使用してきた。7歳の時、清水公学校附属幼稚園に入園し、幼稚園で初めて日本語に触れた。園長は日本人、副園長は「台湾人」だった。Jは8歳の時、清水公学校に入学した。Jの公学校時代の担任は、1・2年の時は「台湾人」、3・4年のときは日本人、5・6年の時は「台湾人」の教師だった。清水公学校に客家系台湾人の生徒がいたかどうかは分からなかった。14歳の時、彰化市にある彰化高等女学校に進学した。インフォーマントJが進学した彰化高等女学校には日本人生徒と「台湾人」生徒がいたが、「台湾人」生徒の方が多かった^{註6}。彰化高等女学校には、日本の音楽学校を卒業した「台湾人」女性の音楽の教師が一人いたが、他は全て日本人の教師だった。

2.2.2 言語生活

Jの育った家庭には、Jの家族の他に、男と女の閩南系台湾人の使用人がいた。家族間及び使用人との使用言語は閩南語だった。兄弟は全員中学・女学校に進学したため日本語ができたが、閩南語を使用していた。しかし、2番目の兄と話すときには日本語も使用した。兄弟それぞれに個室があり、また家族の世話は使用人がしていたため、家族間で交わすことばはそれほど多くなかつ

た。日本統治時代、Jは自分は日本人であると思っていた。

Jは公学校時代、学校内では「台湾人」の友人に対して日本語を使用していた。学校内で閩南語を使用すると、廊下や教室の一番後ろに立たされるなどの罰があった。学校外では閩南語を使うことが多かったが、通学途中は教師に見つかることを恐れ、「台湾人」の友人に対して日本語を使用した。清水公学校には日本人教師と「台湾人」教師がいたが、Jはいずれの教師に対しても、学内外を問わず日本語を使用した。

女学校時代は、学校外においても「台湾人」の友人に対して日本語を使用することが中心となった。彰化高等女学校には日本人と「台湾人」の教師がいたが、Jは教師に対して日本語を使用した。家庭以外では閩南語を使用することはほとんどなく、自宅から一步出ると日本語を使用した。女学校時代は日本語がJにとっての日常語になっていた。彰化高等女学校への通学には汽車を利用した。Jが女学校に通学するときに利用していた清水駅と彰化駅の駅員は「台湾人」の駅員が多かった。「台湾人」の駅員は客に対して日本語と閩南語のどちらでも対応していたが、Hは「台湾人」の駅員に対して日本語を使用した。

3. 「台湾人」駅員に対する日本語使用の要因

3.1 インフォーマントHの発言

日本統治時代の言語生活についての聞き取り調査の結果から、インフォーマントH・Jはいずれも女学校時代、通学で利用する駅で、閩南語と日本語のできる「台湾人」の駅員に対して日本語を使用していたことが明らかになった。今回聞き取り調査を行った他のインフォーマントからも、当時の「台湾人」駅員は全員日本語を習得しており、一般に閩南系台湾人の駅員は日本語と閩南語、客家系台湾人の駅員は日本語と閩南語と客家語が使用でき、客の使用言語に応じて各言語を使い分けて対応していたとの証言を得た。インフォーマントH・Jは「台湾人」駅員に対して閩南語を使用することも可能であったにも関わらず、なぜ自ら日本語を選択し使用したのだろうか。インフォーマントH・Jの「台湾人」駅員に対する日本語使用の要因を考察するにあたり、インフォーマントHの次の発言に注目したい。

「（「台湾人」の駅員とは）日本語で話します。あのとき学生だからね。」

なぜ「学生だから」、Hは「台湾人」の駅員に対して日本語を選択し、使用したのだろうか。インフォーマントJからは「台湾人」駅員に対する日本語使用の理由を聞き取ることができなかったが、インフォーマントH・Jが「台湾人」の駅員に対して日本語を使用していたのは、公学校卒業後、女学校に在学していた時であったという点で共通する。では、日本統治時代、女学校に在学する「台湾人」の学生であるということは、どのような位置付けにあったのだろうか。

3.2 女学校に在学する「台湾人」学生の位置づけ

日本統治時代の教育制度、就学率、女学校入学状況から、当時、女学校に在学していた「台湾人」学生であるインフォーマントH・Jの位置づけについて考察してみたい。

日本統治時代の台湾では、1943（昭和 18）年から初等教育における義務教育制度が実施された。それまでは、「台湾人」は自らの意志により教育を受けるかどうかを決定することができた。台湾総督府（1945）によれば、「台湾人」の初等教育就学率は義務教育制度実施前の 1940（昭和 15）年度では 57.44%であった。その男女別内訳は、男児が 70.56%、女児が 43.41%であり、女児の就学率は男児に比べ著しく低かった。

インフォーマントが学んだ公学校とは、日本語を常用しない者が学ぶ初等教育機関であり、主として「台湾人」子弟が収容されていた。一方、台湾在住の日本人子弟は小学校に収容されていた。中等教育以上は、1922（大正 11）年 2月に公布された「新台湾教育令」により日本人と「台湾人」の共学を原則とすることとなっていた。中等学校の入学試験は全教科が日本語で行われ、入試問題は小学校の教科書を出典とすることが多かった。そのため、一段レベルの低い教科書で学んでいた公学校の「台湾人」児童にとって、日本人児童と同一の入学試験を受けて合格することは容易ではなく、中等学校に進学するには相当の日本語力と学力が求められていた。「台湾人」子弟が中等学校に進学することがいかに難しい状況にあったかは、統計によっても確認できる。

次の表は、インフォーマントH・Jの在学していた蘭陽高等女学校・彰化高等女学校の 1938（昭和 13）年度の入学状況である。表内の「内地人」は日本人を、「本島人」は「台湾人」を指す。

単位(人)

学校名	志願者				入学者			
	内地人	本島人	其他	計	内地人	本島人	其他	計
蘭陽高等女学校	76	107	0	183	63	41	0	104
彰化高等女学校	92	486	0	578	54	101	0	155

1938(昭和13)年4月30日現在

表 1938(昭和13)年度蘭陽高等女学校・彰化高等女学校入学状況^{註7}

インフォーマントHが在学していた蘭陽高等女学校は、1938(昭和13)年度の入学状況をみると、「内地人」の志願者76人のうち63人が入学しており、「内地人」の合格率は82.9%だった。「本島人」の場合は、志願者107人中、41人が入学しており、「本島人」の合格率は38.3%だった。インフォーマントJが在学していた彰化高等女学校は、蘭陽高等女学校と異なり、「本島人」の占める割合が高い学校であった。しかし、1938(昭和13)年度の入学状況をみると、「内地人」の志願者92人中、54人が入学、「本島人」の志願者486人中、101人が入学と、「内地人」の合格率は58.7%であるのに対し、「本島人」の合格率は20.8%であり、蘭陽高等女学校と同様、「本島人」にとって合格するのは容易ではなかったことが分かる。

こうした教育制度・就学・進学状況の中で、インフォーマントH・Jは義務教育実施前に公学校へ入学し、公学校卒業後は、「台湾人」にとって非常に難関であった入学試験を突破し、女学校に進学した。そして、女学校では、日本人生徒と肩を並べ、日本人教師のもとで日本語で学んでいたのである。つまり、インフォーマントH・Jをはじめとする女学校に在学する「台湾人」学生は、日本人子弟と同レベルの日本語力を有し、また学力も高い「台湾人」であったと位置づけられよう。また、日本統治時代、女学校まで進学した「台湾人」は、当時の「台湾人」全体の中でもごく少数であった。

3.3 アイデンティティーと日本語使用

「台湾人」の間に教育が十分に普及していなかった時代に、厳しい入学試験をくぐり抜けて女学校へ進学し、高い日本語力・学力を身につけていたインフォーマントH・Jは、当時女学校の学生であるという自らの帰属を強く認識していたと推測される。例えば、インフォーマントJは在学していた彰化高等女学校について次のように述べている。

「(彰化高等女学校は) 割に古い学校です。その時の台中州はね、中学が台中一中、で、女学校が彰化高女(が) 一番古いんです。ですから、おもしろいんですよ。その時の結婚でも、台中一中学校出たの、彰化高女(の卒業生) から選ぶとかね、彰化高女(の卒業生は)、『あたしは台中一中(の卒業生) じゃないとお嫁に行かない』っていうようなあれが。<中略>結局は、頭もいいしね、もちろんレベルも優秀なの、だから。」

「彰化高女ってね、台北高女と、2番目ぐらいでしょう、台湾では古い学校。だからね、日本人でも彰化高女に入るのを誇りとするんです。(当時、台中州にあった) 女学校は、たった台中高女と彰化高女。もう普通はみんな彰化高女だ。例えば、いつか、ついさっきね、(彰化高等女学校の) 同窓会でみんながおしゃべりしていたときにこういうこと言ったのよ。『あたし達は彰化高女ですよ。あの台中高女がなんだ』って。<笑い>そう、そういうこともみんなでね、笑った。」

また、聞き取り調査において、インフォーマントH・Jの在学していた蘭陽高等女学校・彰化高等女学校は現在でも同窓会活動が頻繁に行われており、インフォーマントH・Jは積極的に関わっていることが分かった^{註8}。例えば、インフォーマントHの在学していた蘭陽高等女学校は、毎年同窓会が開催されているという。

クリスタル(1992)が「言語の主要な機能の一つは、個人のアイデンティティーを表すということ、つまり自分が誰であり、どういうところに『属しているか』について信号を送ること」^{註9}と述べているように、言語には情報を伝達する機能だけではなく、アイデンティティーを表す機能がある。日本統治時代の女学校に進学した「台湾人」生徒とは、日本人子弟並の日本語力を有し、高い学力を持っていることを意味した。女学校の学生であることに強い帰属意識を抱いていたインフォーマントH・Jは、女学校の学生が日本語のできる「台湾人」の駅員に対して使うのにふさわしい言語は閩南語ではなく日本語であると判断し、日本語を使用したのではないだろうか。駅員に対して単に情報を伝達するだけであるならば、閩南語を使用することも可能であった。しかし、インフォーマントH・Jは女学校の学生として使うべき言語は日本語であると認

識し、杉戸（1992）^{註10}のことばを借りれば、自ら「女学校の学生」という社会集団に属することを積極的に表現して自他共に確認するために、閩南語を回避し、日本語を選択したといえる。

インフォーマントHが閩南語と日本語のできる「台湾人」の駅員に対して日本語を使用した理由として語った「学生ですから」という発言は、「私は日本人子弟並の日本語力を有し、日本人生徒と肩を並べて日本人教師のもとで勉強している女学校の学生ですから、閩南語ではなく日本語を選択し、使用したのです。」という意味であると解釈できる。つまり、インフォーマントH・Jが女学校在学中に「台湾人」の駅員に対して日本語を使用したのは、「女学校の学生である」というアイデンティティーによるものだと考えられよう。

4. まとめ

以上、インフォーマントH・Jの、閩南語・日本語のできる「台湾人」駅員に対する日本語使用の要因を、インフォーマントHの発言「学生ですから」を手がかりに考察することを試みた。日本統治時代の教育制度、および「台湾人」子弟の就学・進学状況を分析した結果、インフォーマントH・Jをはじめとする中学校・女学校まで進学した「台湾人」は当時の「台湾人」全体の中でも少数派であり、日本人子弟と同レベルの日本語力を有し、また、学力の高い「台湾人」と位置づけられた。そして聞き取り調査の結果から、インフォーマントH・Jは「女学校の学生である」ことに強い帰属意識を抱いていることが推測された。このことから、インフォーマントH・Jの抱いていた「女学校の学生である」というアイデンティティーが、閩南語・日本語のできる「台湾人」駅員に対して日本語を選択・使用させた要因となったと結論づけた。

本稿では、インフォーマントが駅という場面、また駅員をどのように捉えていたか、そしてそれはインフォーマントの言語選択にどのように関わったのかという点については資料の不足により考察することができなかった。これについては今後の課題としたい。

【注】

1. 日本統治時代の台湾人は人口の90%を占めていた漢族系台湾人と、「高砂族」と称された先住少数民族に分けられる。本稿で表記する「台湾人」とは漢族

系台湾人を指すものとする。「台湾人」は使用する方言群である閩南語・客家語によって閩南系台湾人と客家系台湾人の二つに大別される。閩南語と客家語はお互いの意志疎通が全くできないほど異なっている。そのため、閩南系台湾人と客家系台湾人が意志疎通を図る場合には、一般に、漢族系台湾人の大部分を占めていた閩南系台湾人の使用する閩南語を少数派である客家系台湾人が閩南語を習得し、閩南語が両者の共通語として使用されていた。

2. 東京都千代田区内にて、日本に滞在していたインフォーマントの1人に対し、1998年7月10・28日、8月5日の3回にわたって聞き取り調査を行った。台湾では台北市、高雄市、宜蘭県羅東鎮において、1998年9月6日から9月19日にかけて調査を実施した。聞き取り調査は筆者の作成した調査票に基づき、日本語によって行った。今回の調査では、言語形成期を日本統治時代の台北市、高雄市、屏東市、台北州羅東郡、台中州東勢郡・大甲郡（当時）で過ごした11名の「台湾人」に対して聞き取り調査を行った（「資料1 台湾全図」参照）。インフォーマントの「台湾人」は縁故により求めた。日本統治時代、日本語普及政策は学校教育を中心として展開されていたことから、本調査では、日本統治時代に学校教育を受け、日本語を習得した「台湾人」を対象とした。今回調査を行った11名のインフォーマントのうち10名は、日本統治時代に主として学校教育を通じて日本語を習得している。残る1名のインフォーマントは、日本統治時代に学校教育を受けたことがなく、日本語がほとんどできない。日本統治時代、日本語ができなかった「台湾人」の言語生活も、「台湾における日本語普及」について考察する上で重要であると考えたため、調査協力者である朱伊君氏に閩南語の通訳を依頼し、日本語を習得しなかったこのインフォーマントに対しても調査を実施した。11名のインフォーマントの方言群及び性別は、閩南系台湾人が5名（男性2名・女性3名）、客家系台湾人が6名（男性3名・女性3名）である。本稿で取り上げたインフォーマントH・Jの属性の詳細については稿末の「資料2 インフォーマントH・Jの属性一覧」を参照されたい。全員のインフォーマントから承諾が得られ、調査の内容を全てテープに録音した。
3. 台湾総督官房臨時国勢調査部（1932）によれば、台北州羅東郡三星庄大洲の1930（昭和5）年10月1日現在の総人口は1,283人、内訳は内地人（日本人）が11人、閩南系台湾人が1,272人であり、客家系台湾人は住んでいなかった。また、同書によれば、1930（昭和5）年の国語（日本語）普及率は、

羅東郡三星庄が 13%、羅東郡の中心地であった羅東郡羅東街が 28%であった。

4. 台湾教育研究会（出版年不明）によれば、1938（昭和 13）年 4 月 30 日現在、蘭陽高等女学校の全校生徒 104 人のうち、内地人（日本人）が 63 人、本島人（漢族系台湾人）が 41 人だった。
5. 台湾総督官房調査課（1938）によれば、台中州大甲郡清水街の 1936（昭和 11）年末現在の総人口は 34,527 人、内訳は、内地人（日本人）が 534 人、本島人（漢族系台湾人）が 33,910 人、朝鮮人が 9 人、中華民国人が 74 人だった。
6. インフォーマント J が進学した彰化高等女学校は、主として本島人（漢族系台湾人）を収容していた女学校だった。台湾教育研究会（出版年不明）によれば、1938（昭和 13）年 4 月 30 日現在、彰化高等女学校の全校生徒 575 人のうち、内地人（日本人）が 185 人、本島人（漢族系台湾人）が 390 人だった。
7. 台湾教育研究会（出版年不明）pp.113-114 より作成。
8. インフォーマント J は家庭の事情により、長い間彰化高等女学校の同窓会に参加していなかったが、最近になって参加し始めたと言った。
9. クリスタル（1992）p.22
10. 杉戸（1992）pp.130-131。

【参考文献】

- 井出祥子（1992）「言語とアイデンティティ」『月刊言語』第 21 巻第 10 号
- クリスタル D. 著、風間喜代三・長谷川欣佑監訳（1992）『言語学百科事典』大修館書店
- 近藤純子（1991）「戦前台湾における日本語教育」木村宗男編『講座日本語と日本語教育第 15 巻 日本語教育の歴史』明治書院
- 蔡茂豊（1986）『台湾における日本語教育の史的研究 —1895 年～1945 年—』東呉大学日本文化研究所
- 真田信治・ロング、ダニエル（1992）「方言とアイデンティティ」『月刊言語』第 21 巻第 10 号
- 鍾清漢（1993）『日本植民地下における台湾教育史』多賀出版
- 杉戸清樹（1992）「第 7 章 言語意識」真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹『社会言語学』おうふう 所収

- 台湾教育研究会（出版年不明）『昭和 15 年版 台湾学事年鑑』
台湾総督官房調査課（1937）『日抛時期台湾統計書 85』
—————（1938）『昭和 11 年 台湾総督府第四十統計書』
台湾総督官房臨時国勢調査部（1932）『昭和 5 年 国勢調査結果中間報 台北州
羅東郡』
台湾総督府（1945）『台湾統治概要』
谷富夫編（1996）『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社
トラッドギル P. 著、土田滋訳（1975）『言語と社会』岩波書店
中野卓・桜井厚編（1995）『ライフヒストリーの社会学』弘文堂
ロング、ダニエル（1998）「日本における言語接触とバイリンガリズム —アイデン
ティティと言語使用—」『日本語学』9 月臨時増刊号 第 17 巻第 11 号 明治書院

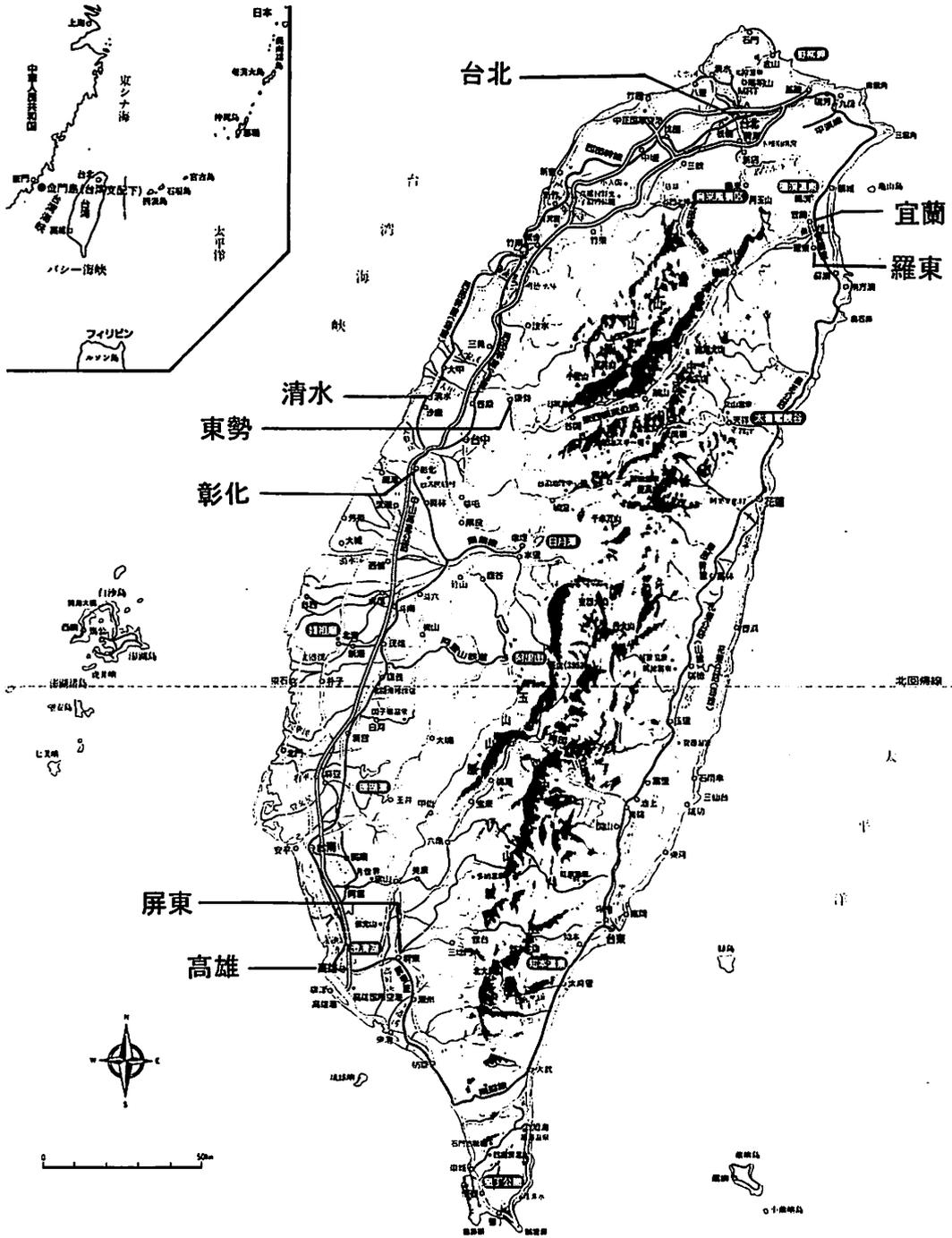
【付記】

本稿は、平成 10 年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文「台湾における日本語普及—言語生活調査を通じて—」の一部である。平成 10 年度長野県ことばの会研究発表会（1999 年 2 月 13 日於松本市中央図書館）において口頭発表した。本稿をまとめるにあたり加筆・修正を加えた。なお、インフォーマントの要請により、インフォーマントの氏名については公表を差し控えた。

研究を進めるにあたり、指導教官の沖裕子先生より懇切なご指導・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。調査の趣旨をよくご理解下さり、快くご協力いただいたインフォーマントの皆様には心からの謝意を表します。台湾調査においては信州大学大学院人文科学研究科修了生の陳佩芳さん・朱伊君さんとそのご家族の方々、またインフォーマントのご家族・ご親類の方々にも大変お世話になりました。さらに信州大学大学院人文科学研究科の陳姿菁さん（現在、お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学中）をはじめとする台湾人留学生の院生諸氏からは、台湾事情並びに文献紹介などの貴重な情報提供をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

（ごうづ みほ・信州大学大学院修士課程 1999 年 3 月修了）

資料1 台湾全図(現在)



資料2 インフォーマントH・Jの属性一覧

(1998年9月現在)

	H	J
性別	女	女
生年月日	1924(大13)5月30日	1930(昭5)年2月10日
年齢	74歳	68歳
方言群	閩南系	閩南系
習得言語 (習得順)	閩南語(読・書・聞・話)	閩南語(聞・話)
	日本語(読・書・聞・話)	日本語(読・書・聞・話)
	北京語(読・書・聞・話)	北京語(読・書・聞・話)
居住歴	0～24歳 台北州羅東郡三星庄大洲	0～20歳 台中州大甲郡清水街
	24歳～現在 宜蘭県羅東鎮	現在 台北市
学歴	7～13歳 大洲公学校	7～8歳 清水公学校附属幼稚園
	13～15歳 羅東女子公学校高等科	8～14歳 清水公学校
	16～20歳 蘭陽高等女学校	14～18歳 彰化高等女学校
職歴	1944～1945年 国民学校教員	無し
	1945～1985年 国民学校教員	
	現在 無職	
日本への渡航歴	有り(光復後)	有り(光復後)

注)  は、日本統治時代に習得した言語